2019 April　春　Vol.14

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

1 改元の年にあたって・・・・・・・・・・・丸山祐之
2～3 歴史は変わる！（4）・・・・・・・・池田義光
4～5 発表80年「穂高神社の研究」・・・・古川幸男
6 神話と気候変動、安曇族・・・・・・・・・会田英二
7 安曇野の天蚕と歴史ロマン・・・・・・・川崎克之
8 「安曇氏族の興亡」の勉強会を終えて ・・金井　透
編集後記に代えて・・・・・・・・・・・・本郷敏行

発行：安曇誕生の系譜を探る会　発行責任者:丸山祐之
会報編集委員長:本郷敏行　事務局長:川崎克之
〒399-7102 安曇野市明科中川手1177－3　☎090-5779－5058

撮影 小松宏彰

改元の年にあたって

会長　丸山祐之

今年の冬は積雪も少なく、異常ともいえる天候でしたが、会員の皆さまにはお変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。

昨年度の会の事業は概ね計画通り進んだものと思います。その中の一つとして金井前会長がまとめられた「安曇氏族の興亡」をテキストにした勉強会を実施しました。参加された皆さまはそれぞれ新しい発見や疑問点などの整理をされたと思います。

本年4月の総会を経て新年度の事業が始まるところですが、企画運営委員会で様々な検討がなされています。その一つとして、今年度は全体会形式とし会員や外部の方々に講師をお願いして、講演会や発表会を毎月実施したいと考えております。その都度テーマが変わりますので、バラエティーに富んだ知見を得る機会になるのではないかと思います。会員の皆さまの積極的な参加をお待ちしております。また若干の地域貢献もしたいと考え、現在検討中です。これにつきましても皆さんのご協力をお願いしたいところです。

5月1日より新元号が「令和」となりますが、会としても個々の会員の皆さまも心を新たにして安曇野の古代史探求に取り組み、楽しみながら相互交流を進めてくださるようお願い申し上げます。

歴史は変わる！（その4）　池田義光

かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察は、新しい史料や遺物などの発見や研究の進展によって変わり、それによって教科書が書き換えられるということは多々ある。

今回も古代史の中から「教科書が書き換えられた事例」をいくつか紹介する。

1「藤原京」が変わった！

藤原京は日本最初の本格的な都城で、天武天皇の時に造営が始まり持統天皇の時に完成して、694年から710年の平城京遷都まで持統・文武・元明天皇の三代の都となった。

[従来の説] かつては、「①京域の規模は、東西約2ｋｍ、南北約3ｋｍで平城京より小規模で、畝傍山・香具山・耳成山の大和三山に囲まれていた。②宮は、京域の北部中央にあった。」と考えられていた。

[現在の説] 1990年代以降の発掘調査と研究の結果、①京域の規模は、約5.3ｋｍ四方で平城京よりやや大規模。②宮の位置は京域のほぼ中央にあった、ということが分かってきた。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］　教科書には、現在の説①②を反映した「藤原京の条坊復元図」が掲載されている。

2「墾田永年私財法」の評価が変わった！

[従来の説] 律令国家の確立により公地公民制が実現していたが、743年の「墾田永年私財法」によって「公地公民」の土地制度が崩れ、律令制が崩れ、朝廷の力は弱体化していった。

[現在の説]　大宝律令制定の時点で「公地公民制」が実現していたかに疑問が出てきた。また、墾田は口分田と同じく国家が管理する「田図（でんず）」に登録され、租をおさめるべき輸租田とされたのだから、律令国家による土地支配はむしろ強化された。実際、この法の後に水田の総面積は増加し、租税収入が増加したと考えられている。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］　『743（天平15）年には政府は墾田永年私財法を発し、開墾した田地の私有を永年にわたって保障した。この法は、政府の掌握する田地を増加させることにより土地支配の強化をはかる積極的な政策であったが、その一方で貴族・寺院や地方豪族たちの私有地拡大を進めることになった。』

3「薬子の変」の理解が変わった！

[従来の説] 810年に起きた政変は、正史の『日本後紀』では、平城(へいぜい) 太上（だいじょう）天皇の寵愛を受けた藤原薬子とその兄の仲成が主導したとしていたので、かつては、「薬子の変」と呼ばれていた。

[現在の説] 現在では研究が進んだ結果、実際にこの政変を主導したのは、平城太上天皇自身であったとの説が有力になり、「平城太上天皇の変」と呼ばれることが多くなってきた。

［高校教科書：山川出版『詳説　日本史Ｂ』］　『嵯峨天皇は、即位ののち810年に、平城京に再遷都しようとする兄の平城太上天皇と対立し、「二所朝廷」と呼ばれる混乱が生じた。結局、嵯峨天皇が迅速に兵を展開して勝利し、太上天皇はみずから出家し、その寵愛を受けた藤原薬子は自殺、薬子の兄藤原仲成は射殺された（平城太上天皇の変、藤原薬子の変ともいう）。』

4 遣唐使終了とその後の交流や国風文化との関係が変わった！

[従来の説] ①遣唐使は894年をもって「廃止」された。②遣唐使廃止以降、唐との交流も次の宋との交流もなくなった。③遣唐使廃止の結果、唐との交流がなくなったために文化の国風化が促された。

[現在の説] ①894年の菅原道真の上奏文は遣唐使の制度の「廃止」は提案してはいない。派遣の「中止」または「停止」提案である。実際894年には派遣の可否に明確な決定はされず結論を先送りしている間に、901年の道真の太宰府左遷と907年の唐滅亡があって事実上遣唐使が終了したのである。②唐の後960年に中国を統一した宋(北宋)と正式な国交は結ばれなかったが、10世紀以降は民間レベルの日中交易・交流がむしろ拡大した。③遣唐使終了後中国の影響は弱まっていなくて、中国文化の基盤と咀嚼・消化の上に「国風文化」が生まれた。

［高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』］ ①『894年に遣唐大使に任じられた菅原道真は、唐はすでに衰退しており、多くの危険をおかしてまで公的な交渉を続ける必要がないとして、派遣の中止を提案し、結局、この時の遣唐使は派遣されずに終わった。』 ②『日本は東アジアの混乱や中国中心の外交関係（朝貢関係）を避けるために、宋と正式な国交を開こうとはしなかった。しかし、九州の博多に頻繁に来航した宋の商人を通じて、書籍や陶磁器などの工芸品、薬品などが輸入され、かわりに金や水銀・真珠、硫黄などが輸出され、～（省略）～、宋の商人の船を利用して大陸に渡り、宋の文物を日本にもたらす僧もいた。』

③『９世紀後半から10世紀になると、貴族社会を中心に、それまでに受け入れられた大陸文化を踏まえ、これに日本人の人情・嗜好を加味し、さらに日本の風土にあうように工夫した、優雅で洗練された文化が生まれてきた。このように10～11世紀の文化は、国風化という点に特徴があるので、国風文化と呼ばれる。』

5「受領」の評価が変わった！

９世紀後半になると、国司の中の最上席の者（一般には「守」）に地方行政の権限と責任が集中するようになり、「受領」と呼ばれるようになった。

［従来の説］かつての教科書では、「受領」の特徴として、過酷な徴税で私腹を肥やす強欲な地方官という側面が強調され、信濃守藤原陳忠（のぶただ）が落馬して谷底に落ちた時にそこに生えていた平茸を採って随行者があきれると『受領は倒るる所に土をもつかめ』というではないかと言ったという『今昔物語』の逸話や、尾張守藤原元命（もとなが）が中央政府に訴えられた『尾張国郡司百姓等解』が証拠として掲載されていた。

［現在の説］現在では、「受領」の評価として、任国内の支配体制を整え、国家財政を強力に支えた、平安貴族社会の支柱としての側面を強調して描かれるようになった。新たな権限と責任を負わされた「受領」を軸とした強力な徴税体制の構築によって、「受領」は中央政府への租税納入を果たすとともに私的に富を蓄積することも可能になったのであり、これは当時の日本社会の実情に合わせた効率的な体制変更であったと考えるようになったのである。

［高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』］ 教科書では、『政府は、9世紀末から10世紀前半にかけて国司の交代制度を整備し、任国に赴任する国司の最上席者（受領と呼ばれた）に大きな権限と責任を負わせるようにした。受領は、有力農民田堵（たと）に田地の耕作を請け負わせ、租・調・庸や公出挙（くすいこ）の利稲（りとう）の系統を引く税である官持（かんもつ）と雑徭（ぞうよう）に由来し本来力役（りきやく）である臨時雑役（ぞうやく）を課すようになった。課税の対象となる田地は、名（みょう）という徴税単位に分けられ、それぞれの名（みょう）には負（ふみょう）名と呼ばれる請負人の名がつけられた。こうして、戸籍に記載された成人男性を中心に課税する律令体制の原則は崩れ、土地を基礎に受領が負名から徴税する体制ができていった。これまでは、税の徴収・運搬や文書の作成などの実務は郡司が行ってきたが、受領は、郡司に加えて自らが率いていった郎等たちを強力に指揮しながら徴税を実現し、自らの収入を確保するとともに国家の財政を支えた。一方で受領以外の国司は、実務から排除されるようになり、赴任せずに、国司としての収入のみを受け取ること遙任（ようにん）もさかんになった。』と記述して、「受領」を軸とした徴税制度の変更にかなりの紙数を割いた上で、藤原陳忠（のぶただ）や藤原元命（もとなが）のような強欲な受領がいたと記述している。

6「摂関政治」のイメージが変わった！

［従来の説］「摂関政治」を行った藤原氏は、天皇や太政官をないがしろにして一族の独裁政治を行い、政治をほしいままにしていた。この時期に平安宮が度々焼失すると摂関家の私邸が仮の御所となり、摂関家の家政機関である政所が国の機関である太政官に代わって国政を動かすようになったという「政所政治論」が通説であった。そのうえで、藤原氏の栄華の証拠として道長の「この世をば～」の歌が教科書に掲載されていた。

［現在の説］ 天皇との関係では、摂関政治の時期でも、摂政と関白の地位は天皇の権威と権力があればこそ成立していたのであり、またこの時期にも太政官の機能は充分に維持されていた。「政所政治論」については、摂関家の私邸が仮の御所となる場合には、摂関は別の場所に移り住み天皇とは同居しないこと、摂関家の政所が扱ったのは荘園のことなど摂関家の家政についてであり、国政に関わることは太政官が扱ったことなどが判明しており、「政所政治論」は否定されている。

［高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』］ 『政治の運営は、摂関政治のもとでも天皇が太政官（だいじょうかん）を通じて中央・地方の官吏を指揮し、全国を統一的に支配する形をとった。おもな政務は太政官で公卿によって審議され、多くの場合は天皇（もしくは摂政）の決裁を経て太政官符・宣旨などの文書で政策が命令・伝達された。外交や財政など国政に関わる重要な問題については、内裏の近衛の陣で行われる陣定（じんさだめ）という会議で、公卿各自の意見が求められ、天皇の決裁の参考にされた。』

発表80年 栗岩英治著「穂高神社の研究」 古川幸男

1939年（昭和14年）に「信濃教育」6月上巻号に掲載された「穂高神社の研究」が本年で発表から80年のメモリアルイヤーとなりました。

現在の安曇氏族研究に於ける重要な論文であり、80年も前に発表されたとは思えない内容で、今現在安曇氏族について言われていることのほとんどは出揃っている感があります。

ここでは内容をざっくりとかいつまんで紹介いたします。大部の論文ですが、まだ読まれたことのない方はぜひ全文をご一読ください。（旧字、旧カナは改めてあります。

1、穂高神社と安曇部

・延喜式神名帳の中、信濃国は48座あり、内訳は大社が７座、小社が41座、穂高神社は大社７座の中の１座となる。

・安曇部の人たちによって穂高見命神社を中心に郡が成された。

・「穂高」は「穂高見」を略したものと思われる。

・正倉院の御物は銘文により郡領家が安曇部であり、民衆にも安曇部がいたことが知れる。

・安曇郡の名の由来は、安曇部がこの地に繁栄しており、それを根幹とした。

2、安曇氏は歴代、宮中に奉仕する。

・なぜ海神族である安曇氏が海岸線でなく内陸に来たのか

・正倉院御物銘の郡領安曇部百鳥の従七位上が内位であり、朝廷に直接奉仕していた可能性がある。

・安曇氏は高橋氏と共に大宝律令発布以前から宮中の内膳司の家柄であった。

3、信濃上代山河の幸

・内膳司としての安曇氏は宮中へ山河の幸を供給する役割を有していた。

・当時の漁撈技術からして鮭鱒を大量に漁獲できるのは山国の河川でのみ可能だった。

・渥美半島は根拠地の一つと考えられ、美濃の厚見郡も大なる痕跡地であると考えられる。よって、東海地方から木曽川を遡り安曇の地に移動したか。

・「源平盛衰記」にも木曽谷は安曇と書かれている、など当時の伝承に従ったものと推想される。

4、初期信濃国司を推想される安曇氏

・大化2年頃、東国の国司が職務上の過失で叱責されており、その国司の一人に安曇連がおり、信濃国司だった可能性がある。（介は高橋氏の祖の膳臣）

・食料供給地として、高橋氏は志摩国、安曇氏は安曇郡、渥美半島などを持っていたのではないか。

・信濃国司任命は安曇部の移住と安曇建郡（安曇郡は

5、信濃における海神系の名残

①筑摩郡に沙田神社、ご祭神に豊玉姫命

②更級郡に氷鉋斗売神社

③埴科郡に玉依比売神社

④小県郡に海部郷

・膳臣（高橋氏）は東海道の海部

・安曇氏は西海道の海部

・住吉神も海神族の神社であり、海神社に住吉神社が伴って存在しているのは、西日本と同様である。

・古代において信濃に移住してきた民族は沢山いただろうが、残ったのは諏訪民族と安曇民族

6、海神族と安曇氏

・安曇氏は「新撰姓氏録」において、海神綿津見神の子孫となっている。海軍提督安曇比羅夫も海神族の子孫。

・安曇氏は高橋氏と並び上代～平安初期まで天皇の大御食（おおみけ）を司る家柄であった。応神天皇の御世に海神所　　属の司配を命ぜられた記事もある。

・海神族研究の中心は安曇氏の研究でもある。

・「新撰姓氏録」ができた頃には他の氏族は滅亡したか、或いは安曇氏の海神族統制が完璧であったか、安曇氏以外の大きな海神族は見当たらない。

・海部という郡名や郷名が存在した処や、海神社とか和多津見神社とか、その他海神系の人名の付けられた神社所在地には安曇氏が存在していた。

・海部郷や海部郡名は多数あるのに、海部を姓氏とする者が少なく、海部の神社も見当たらないのに、郷名や郡名の少ない安曇の方には安曇の姓氏を持つものが史上に多く、神社も多数存在するのは、安曇氏が海洋民族の宰領として存在した一証。

7、安曇氏の出自、安曇の語源

・「わたつみ」とは「わたつみこともち」の略

・「わた」は海以外にも海路という義にもとれる。

・「わたつみこともち」は、海路を司る船の宰領職と考えられる。

・渡部姓（渡辺）は渡りの船頭であったと思われ、本来は安曇氏の直接の部下か。

・大阪市内に渡辺の地名があり、安曇江、安曇寺があり、住吉神社、大海神社がある。

・安曇とか綿積とか書かずに単に「海神社」と書く神社は式内に相当多いが、いずれも「渡部」の神。

8、安曇氏は文化の尖端族

・安曇氏とは航海の師であり、海軍と海運業を兼務する氏人

・特命大使のような役目で三韓に常に使していた。

・安曇寺は安曇の津にあった安曇氏の寺。

・先進文化はいちばん最初に享受する地位にあった。

・推古朝の頃には蘇我氏とともに仏教の普及に尽くし、僧官の有力な地位についていた。
・善光寺の仏像は安曇寺に安置され、後に同族の凡海氏により信濃国にもたらされた。

9、安曇氏の勃興

・応神天皇の3年に海部族の騒乱を鎮定した功により、大浜宿祢が海部族の宰領に任ぜられた。
・景行天皇の征西の折、安曇百足が値嘉島の土蜘蛛を征服して、年々御贄を奉らせるようにした。
・しかし履中天皇元年に安曇連浜子は仲皇子の反逆にくみして失敗し、入れ墨をさせられた。それを安曇目という。当時、海神族の支配階級は入れ墨をしていなかったであろう。
・推古朝には曽我馬子に仕えており、法頭という僧侶関係の地位を得て復活している。
・安曇連比羅夫は皇極紀に大仁の位を持ち、斉明紀にも現れ、百済救援で活躍した。
・大化2年には東国の国司、その他、播磨国・肥前国等でも活躍し、農業方面にも展開した。

１０、安曇氏の盛衰

・安曇郡の郡領の安曇氏も宗家と密接な関係があった。
・安曇氏と高橋氏両家の内膳司を巡る闘争が繰り返され、ついに敗れてしまう。
・延暦11年、勅命に従わなかった安曇継成は佐渡に流罪となり、これが大打撃となり、各地の安曇氏は没落していく。
・信濃国寶宅（穂高）神社への従五位の叙任は安曇宗家が穂高神を奉じて、一族の先住するこの地に来た結果ではないか。
・その後の安曇氏の消息は、平家物語に出てくる安曇次郎為俊、古今著聞集十六に田舎侍の代表として安曇三郎為俊が登場するのを最後に、史上からは見えなくなる。

１１、各方面から見た穂高神社の位置

・穂高神社は日本に1社であるが「穂高見命」を祀った神社は多数あったはずで、多くは現在別の名前で呼ばれている。
・対馬国上県郡の和多都美御子神社、摂津国大海神社、上野国小高神社は「穂高見命」が祀られていたはず。
・その他、安曇郷所在地、凡海郷の所在地には必ず祀られていたはず。
・海部の存在したところの海神社、海部神社にも「穂高見命」が祀られていたところは少なくないと思われる。
・なぜなら、安曇氏が海部等を支配していたばかりか、実は同一民族と考えざるを得ないからだ。
・穂高神社は平安中期にも式内大社であったという事は、安曇郡が日本全国の安曇氏の東漸推移の根拠地。そのため安曇郡名も明瞭に残り、神社も保高見命を高く捧げて残った。
・海神系民族の穂高神社は、出雲民族における大和の大三輪神社や信濃の諏訪神社と等しい。
・穂高神社の存在は、日本民族を作り上げた一つの民族の最終点に残した大きなる史標である。

ざっくりと紹介してきましたが、この論文は今から80年前に発表されています。あまりに出来が良い事と、栗岩英治というビッグネームが書いたという事で後世に与えた影響は大きかったと思われます。

大きなポイントとしては、いわゆる「安曇族」という言葉を使い始めた初期の例であり、特に定義づけはされていない。私としては、「安曇族」という言葉を使い始めたのは昭和5年の宮地直一博士の論文からと見ており、時代的にも「〇〇族」という言葉は多分に皇国史観の影響を受けていると思います。そんなに古くから使われている言葉ではなく、定義づけもされていない。（ただ、それ故に便利な言葉でもあった）

昭和５年より以前に「安曇族」の使用例をご存知の方がいらっしゃいましたら、古川までご一報ください。

再度、押さえておくべきポイントとして

①安曇部の人たちにより建郡された。
②一時期かなり優勢であった。
③安曇郡の名前の由来は安曇氏。安曇氏は海神族である。
④来信は鮭鱒の漁獲であり、東海から木曽谷を通り安曇野へ
⑤海神系神社と住吉神社はセットになっている例が西日本に多い。
⑥海神族研究の中心は安曇氏の研究である。
⑦「あづみ」の語源は「わたつみこともち」

以上のポイントが歴史上ただしいかどうかは不明ですが、平成の時代になってから安曇野市内で進んでいる発掘、明科廃寺・穂高古墳群・明科の古墳群の調査によっては、いろいろと安曇氏研究が進むのか、その存在が否定されるのか、我々も注視して本会及び各自の研究に繋げて行きたいと思っています。

栗岩英治

1878年（明治11年）～1946年（昭和21年）
長野県地方史の育ての親、「信濃史料」生みの親
現在の飯山市の医者の家に生まれる。
1929年　県史編纂委員
1941年　信濃史料刊行委員会
「信濃」を1932年～33年刊行し、若い研究者を育成
長年にわたって足で集めた史料を鋭い史観による研究論文は数え切れず、「わらじ史学」と称された。
「長野県歴史人物大辞典」（郷土出版社）より抜粋

神話と気象災害と安曇族

会田英夫

人間はどこからきて、どこへ行こうとしているのか。これは人類にとって大切なテーマです。私もそう思い続けて20年以上のときが流れました。

探求を通して“安曇族”に関する文献にも触れました。現代を遡る一番古い歴史上の出来事が記載されているものとして、坂本政道著「ベールを脱いだ日本古代史」（ハート出版2012年）の中で、その一片が紹介されています。この説の概略は以下の通りです。

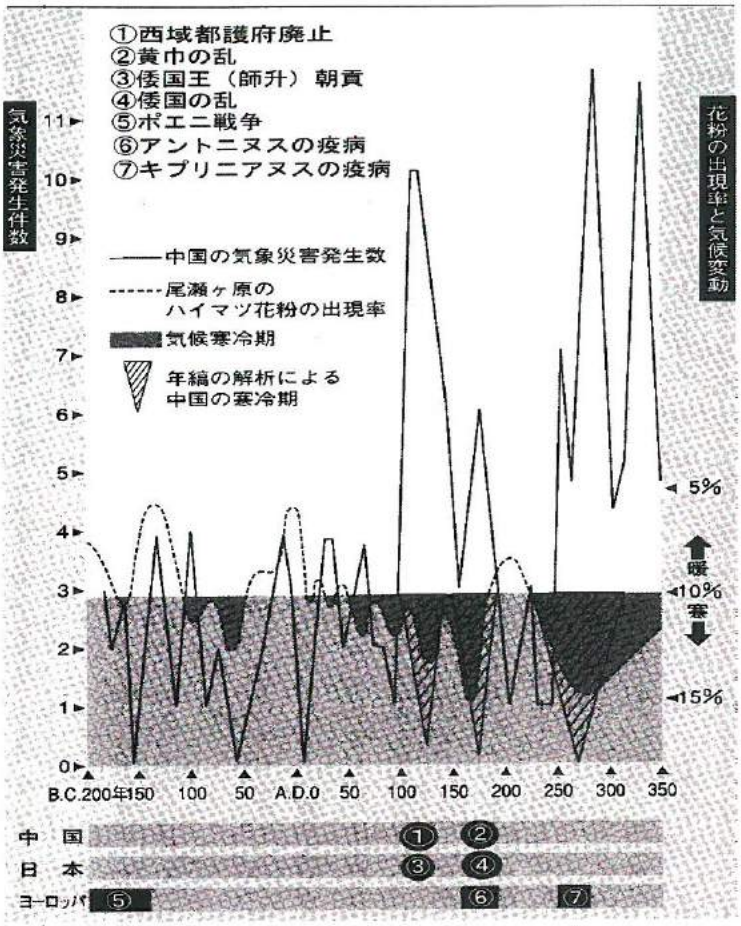
【紀元前1世紀頃、朝鮮半島南部（弁韓）から北部九州に渡来した、子孫が神武天皇へとつながるアマテラス族。当時既に九州にはいくつものグループが渡来して各地に入植していました。アマテラス族は北部九州の糸島半島に定住するようになります。糸島半島には先に入植し、稲作を始めていた部族がいましたが、アマテラス族は彼らを征服する形でそこに入りました。そうできたのは、アマテラス族がより最新の鉄器技術を持っており、かなり征服的な部族であったからです。

「古事記」「日本書紀」（以下、記紀）にはニニギ（神武天皇の曽祖父）が5人のお供を従えて高天原から天降りたとありますが、渡来部族の長がニニギであるアマテラス族は最新の武器や技術を持っていたので、糸島半島に元々住んでいた人々を征服できました。

ニニギはコノハナサクヤヒメとの間に3人の息子をもうけ、そのうちの1人ホオリ（山幸彦）がワタツミ（海神）の娘トヨタマヒメ（豊玉姫）との間にウガヤフキアエズ（鵜茅不合葺命）を設け、このウガヤフキアエズが母トヨタマヒメの妹であるタマヨリヒメ（玉依姫）と結婚し、その末子のワカミヌケ（若御毛沼命）が後の神武天皇となります。こうして、アマテラス族は海の民である海人族（あまぞく）と婚姻関係を再三結び、この地域での地歩を盤石なものにしていきました。この海の民であり、志賀島一帯を勢力地としていた古代の有力海人族、それが安曇族であり、彼らは金印で知られる奴国とも強い協力関係にありました。】

ところで、紀元後300年間に世界中で少なくとも３回以上の寒冷化がありました。図にあるように、中国の気象災害発生数と寒冷期が連動しています。これが背景となり、歴史の転換が起き、中国の黄巾の乱（AD184年）や日本国内での倭国の乱も発生しています。

これらの要因によって、中国では三国時代へ、朝鮮半島も統合へ向け争いが増し、日本では九州への人口流入など人口増への対応や邪馬台国を盟主とする邪馬台国連合の衰退などが重なり、アマテラス族の王家は機が熟したとして、神武に大和への進軍を命じます（神武東征）。



中国の気象災害と紀元後100年以降の気象悪化
（安田善憲「龍の文明太陽の文明」PHP研究所）

神武自身は、海人族の血を３/４受け継いでいます。伊都国に根を下ろしたアマテラス族は、その後、奴国を併合し、遠賀川（おんががわ）流域から現在の北九州にかけ領域を広げました。奴国は安曇族とは強い協力関係にあり、アマテラス族と一体となっています。北部九州から瀬戸内海を小舟で渡り、淡路島まで至るルートは古くから存在しており、神武東征の折、舟の漕ぎ手を担い先導役を果たしたのは安曇族に代表される海人族と考えられます。

坂本氏としては「記紀」にある日向（ひゅうが）は日向国（宮崎県）ではなく、神武東征は岡水門（遠賀川河口）へ立ち寄った後、宇佐に寄り、瀬戸内海を東進したとの説を支持しています。

このあたりの歴史の流れについては、私の著「古代への誘い」をご覧いただければと思います。

古代を探る手法はいろいろとありますが、大事なことは一つひとつの物証の積み重ねと併せ、地球規模による人類史が日本を始め世界中の動きと連動していることを前提にした展開の中で検討する必要があると考えています。

安曇野の天蚕糸をめぐる歴史ロマン　川 﨑 克 之

安曇野のエメラルドグリーンの天蚕糸が薬師寺の大講堂に掲げられていた繡仏（しゅうぶつ）の復元に使われている。現在、薬師寺東京別院にて製作中で、幅6メートル、天地9メートルという巨大なもので完成はあと10年ほど先のことになるとか。
薬師寺は法相宗の大本山で開基は天武天皇。1998年（平成10年）にユネスコより世界遺産に登録されている名刹。

阿弥陀三尊像繡仏絵図　（ 大講堂納入予定）

『日本書紀』天武天皇9年（680年）11月12日条には、天武天皇が皇后（後の持統天皇）の病気平癒を祈願して薬師寺の建立を発願したとある。しかし、天武天皇は寺の完成を見ずに朱鳥元年（686年）に没し、伽藍整備は皇后即ち持統天皇に引き継がれた。

薬師寺の管長として大講堂の再建に携わった松久保秀胤師が安曇野の天蚕飼育の視察に訪れた際の講話によれば、大講堂に掲げられていた「繡仏」は本尊の薬師如来像がまだ未完成だったので、天武天皇の冥福を祈るために持統天皇が布に絹糸で阿弥陀如来像を刺繡させたものだとし、この「繡仏」の復元にあたって、天武天皇とゆかりの深い信濃の安曇野の天蚕糸が使用されることは非常に意義深いことだと言う。

天武天皇と信濃、安曇野との因縁の深さについては日本

天蚕糸と繭

①天武天皇が大海人皇子と呼ばれた頃、天智天皇の後継争いである壬申の乱（672年）において大友皇子に勝利したのは信濃など東国の騎兵によるところ大であったと言われており、安曇野の猪鹿牧の馬が使用されたことが想像でいる。（日本書紀・壬申紀）

②遷都を計画するために、三野王などを信濃に派遣して地形を視察させ（日本書紀天武天皇13年1月28日条）その後、信濃国の図面が提出されている。（日本書紀天武天皇13年閏4月11日条）遷都先は安曇野という説がある。（亀山勝：安曇族と徐福）

③東間温湯に行宮を作るよう命じた。東間温湯は浅間温泉または山辺温泉ではないかと考えられている。（日本書紀天武天皇14年10月4日条）

④大海人皇子と考えられる皇極の太子が安曇野を訪れて穂高神社を創建するなどの事績を残している。皇位継承争い（壬申の乱）を見据えて勢力を扶植したか？（仁科濫觴記・信府統記）

⑤天武天皇は安曇氏族の一族とされる大海（凡海）氏に養育されたと言われ、大海（凡海）氏が天武天皇の葬儀の折りに幼少の頃のことを誄（しのびごと）しており（日本書紀天武天皇15年9月条）、安曇氏族と深い関りがあり、安曇氏族出身であるとする説もある。（小林耕：安曇皇統の抹殺と八面大王の正体）

このように天武天皇の信濃に寄せる思いはひとかたならぬものがあり、信濃・安曇野との強い因縁を感じざるを得ない。その天武天皇の冥福を祈るために皇后（後の持統天皇）によって作られた「繡仏」の復元に当たって安曇野の天産糸が使われることになったということは、時代を超えたロマンと言える。また持統天皇は薬師寺の本尊・薬師如来像の完成を見届けてから退位しており、天武・持統の絆の深さを伺わせてくれる。
繡仏の完成が待ち遠しい。

（写真提供：やまこの学校）

「安曇氏族の興亡」勉強会を終えて　副会長 金井 透

勉強会は平成29年5月から始まり、31年3月まで足かけ3年、23ヶ月にわたって行われました。第2月曜と第4土曜の2班編成とし、どちらか都合の良い日に参加するということで両班合わせて30名ほどの参加者で始めました。当初は読み合せをした上でその項ごとに意見交換しながら進めましたが、金井恂氏の論稿は160ページ12項にわたる長大なもので、難解な部分も多く、いつ終わることができるか心もとない進捗状況でした。そこで各自事前に読み込んできてもらい、疑問点について討論する方法にしました。論考は12項にわたり、2年たっぷりかけても終わりが見えない大勉強会でした。

①安曇郡と安曇氏族の関り、②氏族集団の形成と氏姓の発生、②安曇氏族と安曇姓の発生、⑤安曇氏族の祖神綿津見命、⑥安曇氏族の一族、⑦古代の歴史書に見る安曇氏族の経歴と特徴、⑧安曇氏族は海人族だったのか、⑨膳職における安曇宿祢と高橋朝臣の争い、⑩安曇連比羅夫は軍人ではなく文官だった、⑪全国の綿津見神社と安曇氏族、⑫安曇氏族の全国進出、⑬ゆかりの地に見る安曇氏族の興亡、安曇氏族は「海神族」だったか？

安曇氏族について初めて体系的に論述したもので、これまで巷間に流布されてきた説に大胆に挑戦する内容で、勉強会の参加者からも納得する一方で反論が試みられる場合もありました。疑問を積み残しつつ新鮮かつ大きな課題を提起してくれる勉強会となりました。

編集後記に代えて　編集委員長　本郷敏行

「久方の光のどけき春の日に・・・・・・」と古の歌人はうたいましたが、そこここに春の息吹が感じられ自然界の営みの確かさに感嘆する今日今頃です。皇室の御曹子の小学校卒業文集に“人間は自然に生かされている”という意味の文言があったそうですが、素晴らしい感性だと思います。縄文人から引き継いでいる日本人の世界観がちゃんと体内に流れていると恐れ入る次第です。

そういえば彼の姉君も「リベラルアーツ」を身につけたいと学習院とは別の大学を選んだことを思い出します。この言葉は一時期盛んに論ぜられましたが、今はあまり目につきません。しかしこれは一時的なものではなく人の一生を通じて必要なものであり古来哲人といわれる人々が論じてきたものでもあります。日本語訳では「教養」とされていますがずっと幅広いもので人間の根源から天文学まで含まれます。人の役に立とうとする人にとっては幼少の頃から修得に励んできたものです。

然るに今の世は教養人と言われる人が極めて少なく、特に政官界においてはひどいものです。ペラペラ答弁の宰相、漢字が読めない大臣、良心を売ったような官吏等々枚挙にいとまがありません。

さて、この号が出る頃は新元号が発表され世は様々な動きが起きるでしょうが人間の営みの基本は変わりないと思います。我々は昭和から平成への節目を経験しているわけですが、あまり感慨はありません。歴史は静かに動いているのでしょう。我々はその歴史を学ぶために集い十余年が経ちました。歴史といっても我々は安曇を作った人々のルーツとその経緯に的を絞りました。しかしそれは簡単なことではありません。我々には十分な史料もなく専門的な学識もありません。しかも関連する分野は考古学、人類学、言語学等々多岐にわたり、ひたすら先人の研究に挑戦する日々でした。その学習方法にしても集団で行うことの難しさもあります。部会制や課題別学習の場を設けてきました。今はまだ学習途上にありますが、新年度は公開学習方式とし、広く会員以外にも講師をお願いし、色々な課題の解明に努めていくことになります。一般の方にも参加を呼び掛け当初の目標の一つである市民の団体として活動していきます。安曇野の歴史は日本列島の歴史と切り離しては語れません。そして日本の歴史はあいまいな部分が多くあります。いまだに神話に頼り、神話をそのまま歴史とするようなものもあります。建国の日一つをとってもこれは歴史とはいえないと思います。我々はこのようなもの一つでも本当の歴史を探り真相を知りたいと願っているわけです。

学問の方法として「推論」が認められています。可能な限り合理的な条件のもとでの推論です。我々としても真理を追求する立場に立つ者としてならば推論は許されると思います。素人ではありますが基本的立ち位置を守り歴史の真実に挑戦することを目標にこれからの活動に取り組んで行きたいと願っています。

なんとなく青臭い感がありますが我々も何らかの成果を出すことが求められているのではないでしょうか。個人的にはいろいろな考えがありましょうが、結論の出ない行為はストレスが溜まります。それが不満となって会を去った人々もおります。会報はそういった不満を溜めないための議論の場にもなりえます。会員の皆さんの積極的な発言をお願いするものです。